

公益財団法人 日本クリスチャン・アカデミー機関誌

はなしあい

題字 元総理 片山哲 筆

2017年11月号

発行編集人

公益財団法人 日本クリスチャン・アカデミー
代表理事 小久保 正

発行所

日本クリスチャン・アカデミー
京都市左京区一乗寺竹ノ内町23
075 (711) 2147

NIPPON CHRISTIAN ACADEMY

第589号

フクシマ原発事故が発生したのは、2011年3月11日であった。それからすでに7年近くも経っている。それにも拘わらず、それがなぜ今なお私たちの課題なのか。それは、この事故が提起した問いは、我々の社会の在り方を根柢から問うものであったにも拘わらず、日本社会は、それと真剣に向き合うことなく、問題を隠蔽し、何も無かったかのごとくに、忘却のあなたに葬り去り、かつてと同じ道に戻ろうとしているからである。それは、この事故により長年住み慣れた地を追われ、帰るべき故郷を失ってしまった10万人を越える人たちの呻きと、訴えに耳を貸さず、それらの人たちの苦難を空しくするものである。

原発事故により、数多くの人たちが突然平穏な生活を破られ、生命の危機に晒され、いつ果てるともされない放射線障害の恐怖に追われるようになったのは、今回が初めてではない。人類は、30年以上も前の1986年に、すでにウクライナのチェルノブイリでそのような事故を経験している。しかし、日本人の

多くは、それは技術水準の低い国での特殊なケースであり、技術水準が高いわが国では起こり得ないことだと言ってきた。それは遠く離れた限定された地域での少数の人たちだけの問題であり、自分達には関係無い話だと片づけてきた。それが人類全体への重大な警告を発しているとは思

なぜ原発は今なお私たちの課題なのか



関西セミナーハウス活動センター運営委員長 小久保 正

いもしなかった。だから今回フクシマで同じような事故を繰り返すことになってしまった。今またフクシマ原発事故を、東北地方の限定された地域の少数の人たちだけの、他の地域の人たちには関係ない問題だとして片づけてしまいうなら、私達の次の世代の人たちが負う社会の歪は甚大なも

のなるであろう。
イエスは、高みに立って世を論ずる識者に向けて、貧しく小さくされた者の傍らに立って、そこに生きておられる命の神と共に歩むようにと勧められた。

私達は、7年前フクシマで

何が起きたかを改めて検証し、そこから何をなすべきかを丁寧に学び取り、人間だけでなくどの被造物も、創られた命の輝きを生かし合える世界を構築する道を探りたいと思う。当財団関西セミナーハウス活動センターではその思いを具体化するために、毎年お正月に原子力発電の在り方を考えるフォーラムを開催し、その記録集を発行してき

た。今回はその6回目で、「原発との共存は可能か?」フクシマからの問い」と題して、2018年1月7日(日)8日(月・祝)に開催する。発題講演は、技術的側面から九州大学教授で福島原発事故政府事故調査委員を務められた吉岡 斉先生にお願いし、倫理的側面から上智大学大学院実践宗教学研究科教授で、東京大学名誉教授の島園 進先生にお願いする。

日本カトリック司教団は、この問題の重要性に鑑み、原発の在り方を多方面から論じる神学、哲学、宗教学、科学技術の専門家からなる委員会を立ち上げ、2016年10月に、「今こそ原発の廃止を日本のカトリック教会の問いかけ」と題する包括的で説得力に富む書物をカトリック中央協議会から刊行した。今回のフォーラムの発題講演者は、いずれも同書の執筆、助言に携わったメンバーの一人である。多くの方が、このフォーラムに参加して、共に考え、討論を豊かで有意義なものにして下さることを期待する。

(京都大学、中部大学名誉教授)

関東活動センター

●2017年度 関東フォーラム 宗教対話III

「編集者とその本音を語る」第2回
「中川和夫さんに聴くー今、構造的変動の中にある出版界の現状、その中で編集者の役割とは？」

ゲスト 元岩波書店編集部、中川 和夫さん
現在ぶねうま舎社長
聞き手 上智大学文学部教授 月本 昭男さん

2017年10月20日(金)
会場 カフェ・エクレシア(台東区蔵前)

ブネウマの意味

第二回のゲストに、岩波書店で『岩波版旧新約聖書』を編集した中川和夫さんをお招きして「今、構造的変動の中にある出版界の現状、その中で編集者の役割とは」をテーマに、聞き手として旧約聖書の月本明男さんをお招きして行われました。



ブネウマは言うまでもなく、「息」から「聖霊」を意味するヘブライ語ですが、クリスチャンではない中川さん

によれば、「風の谷のナウシカ」とか、「風の又三郎」のイメージだそうです。中川さんは1982年に岩波書店に入社してから旧新約聖書など、文科系の単行本を担当してきたことから、自分の編集者としての経歴を紹介し、「絶滅貴種」である「編集者」の作業の実態を、話されました。中川さんが「高いハードル」とよぶ、週一回の編集会議の实情から、著者の20年〜30年の人生がかかった書物ということもあり、一回の会議ではなく、一冊の出版に5〜6回かかることもある。編集の現場は閉ざされた空間であると言われました。

「IT革命と、バーチャル空間での魔女狩り」

今、紙媒体の「出版」は1980年代に始まる「IT革命」の時代を迎え、大きな変化に直面しています。紙媒体は、96年をピークに下降線をたどり、スマートフォン

の普及が決定的でした。岩波での中川さんの先輩である八巻和彦さんによると、1450年、西欧での「活版印刷」の開始、「グーテンベルク革命」の後、それまでの「写本」と活版印刷による書物の併存は、200年くらい続いたといえます。グーテンベルク後、印刷による紙媒体はスキャンダルの伝達など、センセーションを中心にいわゆるイエローペーパーが成立しました。この時代に多発した魔女狩りに、印刷物の普及が大きな役割を果たしたのと同様に、今ネットで起きている炎上は、バーチャル世界の魔女狩りであり、いじめの多発と並行現象ではないかと指摘されました。

今後に希望はあるか

このような状況に直面するとどうしたらよいかわからず、一瞬のうちに空中浮揚のようにになります。古井由吉は、日本語論のなかで言語解

体のおそれにふれています。阿部公房が「ワープロは文体を変えるか」と言ってから約30年たちましたが、まぎれもなく文体は変わり、息の長い文体がはやっています。しかし、ラインの文章は1400字の枠があり、また漢字変換の必要によって、変換ミスという「しょうがい」を免れませぬ。別の文脈にはまって意味が通ってしまうことがあります。

今後に希望はあるのでしょうか。18世紀末のフランス革命から約200年ですが、ユゴー等の大作家が出てから今日までの小説の興隆があります。文学の今を考えるとまだ見えていない新しい世界があるのではないのでしょうか。

時代の証言としての書物の意味

大きな問題提起を受けて、月本さんは、大学闘(紛)争は「学問の意味への問い」でした。重箱のすみをつくような仕事への疑いもありましたが、つきつづけければ穴があくということもあるのではないのでしょうか。時代の証しとして残る本があってもよい

のではないかと述べられました。

編集者とは橋をかける仕事

市川邦雄さんから「信徒が聖書にふれる必要があると思ひ、信徒が読めるものを出版してきた」という発言に対し、中川さんは、岩波は意識の高い人が多いが、「編集者は何ものでもないという位置に立つべきであり、また、あまり関係のないところに橋を架ける仕事です。聖書という世界最大の物語と現場の牧師の説教に橋をかけるという仕事は、クリスチャンではないからできたのではないか」と言い、古代から中世にかけてのキリスト教教義論争を扱ったノンクリスチャンである、坂口ふみさんの『個の誕生——キリスト教教義をつくった人々』という本が1996年に出されてから年間5000部が売れて岩波では最も収益が上がっているという事実がふれられました。

教勢の推移と紙媒体の現象は同一か

戒能信生さんから「(キリスト教の)教勢の推移と書籍販売実数の推移はほぼ同じカーブをえがいて1995年



これまで開発の問題を参加型学習や話し合いを通じた学びで追求してきたが、今回は、対話を通してより深く考えるということそのものに取り組みたい。

まずは、「対話を通して考える」というテーマで森さんのお話を聞いた。現代社会は同じ境遇の人どうしがコミュニケーションを形成する「部族化」が進行しているが、同じ考えの人どうしが集まって共感し

合い、異なる立場との交流がなくなってしまうこともまた「部族化」であるということ、「考える」には他者の存在を必要とし、異なる他者との対話を通して「考える」をより深められるということを学んだ。

第2セッションからは、実際の対話を行った。最初は、対話に対する参加者個々の意識のずれが大きく思考の深まりを実感するには至らなかったが、2日目には、対話の中で発題者の言葉の意味や思いを丁寧に聴き取っていくことを通じて、「問い」の裏に隠れていた本当の課題が浮かび上がってきた。

対話を通して考えるという

を境に減少しています。」という発言に中川さんは「物語への不信」という意外に深い問題かもしれないね」と

東活動センター委員、武田利邦)

応答され、大きな宿題を出されたとてもみりの多い時を共有できました。(まとめ、関

関西セミナーハウス活動センター

●2017年度「開発教育セミナー」第3回
 「『考える』をファシリテートする
 ～民主主義を耕すために」
 講師：兵庫教育大学大学院教職
 教育実践開発専攻教授 森 秀樹さん
 2017年9月9日(土)～10日(日)



イエスは、自分に危害を加える者にすら手向かうことを戒め、むしろ敵のために祈ることを勧めた。しかるにイエスの後を継いだ教会は、戦争に協力し、正義のために戦うことをさえ勧めた。いつからそんなことになったのかを、古代キリスト教史を専攻する土井健司さんに解説して頂いた。

初代教会は、軍務に服する

ことを禁じた。ローマ軍の兵士になることは、皇帝という偶像を礼拝し、人を傷つけることになるからであった。兵役を拒否して処刑された人もいた。

しかし2から4世紀に信徒が急速に増加すると、コンスタンティヌス大帝は313年のミラノの勅令によりキリスト教を公認し、さらに国教にまでした。それに伴い教会は、信徒がローマ軍に参加することを承認し、さらに教父のアウグスティヌスは、正義のための戦争は許されると説くようになった。

この解説に対し参加者から、キリスト教徒が2から4世紀に急速に増えたのは何故

ことについて、時間の制約からすつきりわかるまでには至らなかったが、民主主義の作法としての対話の在り方につ

いて大きなヒントとなり、深く考えさせられたセミナーとなった。

●2017年度 修学院フォーラム「社会」第1回
 宗教と戦争を考える(3)
 「キリスト教はなぜ戦争について容認
 するようになったのか」
 関西学院大学神学部教授 土井 健司さん
 2017年10月7日(土)

かとの質問があり、講師は、キリスト教徒が当時顧みられなかった病人や、死人を丁寧に介抱したためであると答えた。これは、日本で16世紀の高山右近の治世にキリシタンが急速に増えたのと似ている。しかし日本では、そのためキリスト教徒が迫害されたのに対し、ローマでは、そのためキリスト教が公認され、国教にまでされた。

その公認と国教化の代償は大きかった。それと引き換えに教会は、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」とのイエスの命をかけた戒めを、封印してしまった。その後キリスト教はヨーロッパ各地に、さらにはアメリカ大陸にまでも広がり、どこにおいても国の政策に大きな影響を及ぼす存在にまでなった。しかし主だった教会はイエスの戒めを封印したままで、イエスの戒めに戻ろうとした少数者を孤立させるか、迫害した。

戦闘がアウグスティヌスの時代よりはるかに過酷になった今日でもなお、正義のための戦争があり得るか否かが問われる。

プログラム案内

◆**関東活動センター**

■**聖書を読む講座I**

「いのちをかけてのメッセージ『イエスの譬え話』に聴く」(全9回)

講師：山口 里子さん(日本フェミニスト神学・宣教センター共同ディレクター)

日時：2017年4月～2018年1月(8月除く)

第2火曜 18:30～20:00

⑧12月12日、⑨2018年1月

会場：早稲田奉仕園スコットホール

参加費：1,200円/学生500円

テキスト：『イエスの譬え話2』

新教出版社

共催：早稲田奉仕園

■**2017年度関東フォーラム 宗教対話I**

「日本キリスト教史を読む」第1期(明治篇全7回)

講師：戒能 信生さん(日本基督教団千代田教会牧師)

第7回「柏木義円の生涯とその牧師としての闘い」

日時：12月14日(木)14:00～16:00

会場：日本キリスト教会館1階

参加費：1回500円

◆**関西セミナーハウス**

■**月釜 清心会**

日時：2017年12月10日(日)

9:00～15:00受付(1、8月を除く年10回)

於：関西セミナーハウス
年会費：5,000円、臨時会費1,000円

◆**関西セミナーハウス・関西セミナーハウス活動センター共催**

■**2017年度もみじまつり**

茶席3席、邦楽席(箏演奏)

「水墨画の世界」大島 偕美

「和太鼓の響き」演奏 和太鼓 宴

日時：2017年11月23日(木・祝) 9:00～16:00

会場：関西セミナーハウス

参加費：入館券(抹茶二席、お弁当、コンサート) 前売3,500円、当日4,000円(若干数)

◆**関西セミナーハウス活動センター**

■**2017年度お茶のこころと宗教のこころII**

「聖書をいっしょに読みましょう」(全8回)

座長：榎本 栄次さん(日本基督教団牧師)

日時：2017年4月～12月(8月除く)第1または第2木曜

13:30～16:30

⑧12月7日

会場：関西セミナーハウス

参加費：1回1,500円 学生500円(抹茶含む) 定員：20名

■**2017年度修学院フォーラム「社会」**

第3回核兵器禁止条約を知り考える集い「なぜ日本は「核兵器禁止条約」に賛成できないのかー何が日本を守るのか」

講師：富田 宏治さん(原水爆禁止世界大会起草委員長、関

西学院大学法学部教授)

日時：2017年12月16日(土)

13:30～17:00

会場：関西セミナーハウス

参加費：500円

第4回(第6回エネルギーを考える)

「原発との共存は可能か?～フクシマからの問い～」

講師：吉岡 斉さん(九州大学教授・福島原発事故政府事故調査委員)

島蘭 進さん(上智大学神学部教授・グリーンケア研究所所長)

日時：2018年1月7日(日)16:00

～8日(月・祝)16:00

会場：関西セミナーハウス

参加費：14,000円、学生5,000円(1泊3食込)

■**2017年度開発教育セミナー**

第6回「もっと知りたいイスラム～中東とヨーロッパの「今」から学ぶ」

講師：内藤 正典さん(同志社大学大学院グローバル・スタ

ディーズ研究科教授)

小杉麻季亜さん((特活) 京都イスラム文化協会

アカデミック・アドバイザー、立命館大学講師)

日時：2017年12月9日(土)16:00

～10日(日)12:00

会場：関西セミナーハウス

参加費：10,500円(1泊2食込)

財団本部

<http://www.academy-nippon.com>

関東活動センター

<http://www.academy-tokyo.com>

関西セミナーハウス

<http://www.kansai-seminarhouse.com/>

関西セミナーハウス活動センター

<http://www.academy-kansai.org>

公益財団法人 日本キリスト教アカデミー

代表理事 小久保 正

本部事務局

〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町23
TEL 075-711-2147
FAX 075-701-5256

関東活動センター

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館1F
TEL 03-3207-6198
E-mail:info@academy-tokyo.com

関西セミナーハウス/

関西セミナーハウス活動センター

〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町23
FAX 075-701-5256

関西セミナーハウス

TEL 075-711-2115

E-mail:info@kansai-seminarhouse.com

関西セミナーハウス活動センター

TEL 075-711-2117

E-mail:office@academy-kansai.org

賛助会費・寄付金報告

2017年9月1日～9月30日

(順不同・敬称略)

◆**関東活動センター 賛助会費**

横野 朝彦 37,700
戒能 信生 10,000
吉田 豊 3,000

◆**神学生交流プログラム寄付金**

日本基督教団長岡京教会 10,000
戒能 信生 30,000
小久保 正 10,000
高德 芳忠 3,000
松岡 俊彦 3,000
神保 正男 10,000
浦上 充 5,000
川北 かおり 10,000
立石 昭三 2,000
藤倉 寿美子 10,000

◆**関西セミナーハウス**

寄付金 武藤 高司 10,000

◆**関西セミナーハウス活動センター 賛助会費**

佐藤 優 5,000
椿本 博久 5,000
鳴海 信子 5,000

関西青年アシュラム 10,000

◆**寄付金**

佐藤 優 50,000
日本基督教団長岡京教会 10,000
榎本 璋子 1,000
米澤 敏子 1,000
君村 千代子 1,000
小久保 正 1,000
小久保 玲子 1,000
林 律 10,000
黒井 久代 1,000
東 千代 1,000
山本 絹子 1,000
武山 美登里 1,000
藤本 和子 1,000
佐々木 紘児 1,000
佐々木 公子 1,000
南 和子 1,000
山本 良昭 1,000
鈴木 一志 1,000
安野 優美 1,000
桃山アシュラム 5,000

◆**開発教育セミナー寄付金**

織田 雪江 3,650
比嘉 美智子 3,650
以上、感謝をもってご報告申し上げます。